



圧縮の寒風と入る地下の駅
 日脚伸ぶ五差路にかかる歩道橋
 冬籠り閉切り真四角の時間
 春風は鼻濁音なり甘かりし
 御空より転げてきたり初雀
 雪に音脳細胞の消ゆる音
 十二月昭和の紙幣大きかり
 来ぬ席か空けある席か冬の暮
 妻の記憶に吾は未だ居るか冬の虹
 来し方のしろがね光り芒原
 麦の芽や先に許せば許さるる
 十重二十重枯れ尽したる上越路
 雪もよひ墨痕強き弓の的
 端正な鬼ほど怖し寒の入
 雪見障子上ぐ晩年を覗くかに

甲州 千草
 栗原 公子
 能美昌二郎
 千田 百里
 辻 美奈子
 大畑 善昭
 頓所 友枝
 大川ゆかり
 石川 笙児
 佐久間由子
 荒井千佐代
 渡辺 輝子
 宮内とし子
 平松うさぎ
 荒井千瑳子

虎落笛父の伝言かもしれぬ
 裸木となり骨太の木となりぬ
 神渡し白粥掬ふ貝の匙
 しなざかる越の嶺々深雪晴
 無頓着に見えて繊細ちやんちやんこ
 遠富士の浮力あるごと冬うらら
 風花や遠つ淡海の照りかげり
 燃え上る梵字のごときどんだかな
 北越雪譜生活は雪の深さほど
 埋火を掻いて本心言へぬまま
 化学式忘れ狐火疑はず
 悼むとは語ることなり返り花
 踏ん張つてパントマイムの大冬木
 数へ日を追ひ抜いてゆく救急車
 寒星の威をもて光り一つづつ

平城 静代
 川高郷之助
 栗坪 和子
 道端 齊
 古居 芳恵
 大矢 恒彦
 鈴木 齊夫
 鈴木 基之
 広海あぐり
 関根 瑤華
 澤田 英紀
 水谷 昭代
 石橋みどり
 浜田はるみ
 枇杷木 愛

